札幌学院大学
Sapporo Gakuin University
人文学部報
●人間科学科●英語英米文学科
●臨床心理学科●こども発達学科
●大学院臨床心理学研究科
2013・3・1　No. 34
編集発行/札幌学院大学人文学部広報委員会
〒069-8555 江別市文京台11番地 ☎011-386-8111㈹
人文学部 wwwトップ：http://jinbunweb.sgu.ac.jp/

悩むことの楽しさ・わかることの喜び

人文学部 准教授　山越　康裕

私が授業を担当しているある科目では、毎年必ず次のような問題を出している。「以下に示す中国語と、対応する英語の例文とを比べて、中国語と英語のあいだの違い（ただし、表記のうえでの違いは除く）を気づくかぎり列挙しよう」という問題だ。補足として、「誰が誰を愛しているのか」もカッコ内に書き添えている。

我爱你。	<=>	I love you.	（私→君）
你爱我。	<=>	You love me.	（君→私）
他爱她。	<=>	He loves her.	（彼→彼女）
我们爱你。	<=>	We love you.	（私達→君）
他们爱我。	<=>	They love me.	（彼ら→私）
我爱您。	<=>	I love you.	（私→あなた）
你们爱我。	<=>	You love me.	（君達→私）

この問題は、受講者が中国語を知らないことを前提に出題している。それでも、これらの情報から少なくとも５点ほど、英語と中国語の違いを見出すことができる。たとえば、英語ではI/meのような語形変化があるのに対し、中国語は常に１人称単数は常に「我」であらわされ、語形変化しないといったような点だ。これ以外の答えをここに記してしまうと、来年度以降の授業運営に支障が出るため、差し控えておきたい。どうしても知りたいという人は、自分自身で答えを考えたうえで、こっそり答え合わせに来てほしい。

この問題で重要なのは、「比べる」という方法だ。主語や目的語を変えることで文がどのように変化するのか、ということを繰り返し、その差異を比べることによって、知らない言語（ここでは中国語）の文法のしくみが徐々に見えてくるようになる。

いままで研究がなされてこなかった言語の音韻や文法のしくみを明らかにする際にも、これと似たような手法がとられる。上の例のように少しずつ内容を変えた例文を話者から聞き取り、比べながら確認するという方法をとることもあれば、採録した資料にあらわれるある形式が、他の場面でどのように用いられている

2012年９月　シネヘン村にて／本学学生＆シネヘン村の友だちとともに

か、一つ一つ資料内の用例をチェックし、分析していくという方法をとることもある。「比べる」ことが重要であるという点は共通している。

私は10数年にわたって、中国の内モンゴル自治区北部のシネヘン村という小さな村で、モンゴル語の親戚にあたる、シネヘン・ブリヤート語とよばれる言語を調査している。この言語の話し手は現在約6,000人おり、そのほとんどがシネヘン村に集住している。もともと彼らの祖先は中国ではなく、国境を挟んだロシア領内に暮らしていた。1917年、ロシア帝国で起こった十月革命による内戦の結果、彼らの祖先は国境を越え、亡命した。その後、居住地を指定され、現在ではその子孫が暮らしている。最初の亡命から100年近くが経過し、ロシア領内に残った人々が使用するブリヤート語とは若干異なるしくみをもつ言語となっている。

このシネヘン・ブリヤート語は、私が現地調査に取り組む以前には、継続して調査されることはなかった。この地域に亡命したブリヤートの人々がいることは知られていたが、彼らの言語がロシア領内のブリヤート語とどう異なるのか、どのような変化が起こっているのかということに、あまり注意が払われてこなかったのだ。そのため私が調査に入った当初は、この言語について一から調査する必要があった。そこで、中国語やモンゴル語の例文を用いながら、彼らの言語の音韻・

文法のしくみを少しずつ調査していった。

何もわからない状態から始めた調査は、当初調べれば調べるだけ、わかることが出てきた。冒頭の中国語と英語の例文を比べるのと同じように、パズルを解いていくような楽しさとともに、比べることでさまざまなことが見えてくる。これが非常に快感だった。「わかる」こと、謎を解くことに対して楽しさを感じるという気持ちは、人間が誰しも感じることができるものだと思う。ほかの人がまだ取り組んでいない問題であったり、解決に至っていない問題を解く場合にはよけいに、わかったときの喜びは大きくなる。調査を始めた段階というのはこの喜びに満ち溢れているのだ。こうした分析を経て、おおまかな言語の姿が見えてくると、今度は次第に解決できない問題が山のように出てくる。文法のしくみを分析するうえでも、すっぱりきれいに説明できないケースや例外が多く出てくる。

日本語の例をあげよう。「形容詞」という品詞がある。日本語ではふつう、「うるさい」「楽しい」「キモい」のように「○○－い」という形で述語に用いられるタイプの語類だ。この形容詞は、動詞を修飾するときには「楽しく遊ぶ」のように「○○－く」、名詞を修飾するときには「楽しい遊び」のように「○○－い」という形をそれぞれとる。しかしこうならない場合もある。「大きい」や「小さい」といったいくつかの形容詞は、「大きいリンゴ」「小さい種」のようにもいえるが、「大きなリンゴ」「小さな種」のように「○○－な」という形でも名詞を修飾できる。ほかの形容詞は「楽しな」のようには言えないのに、だ。こういった、ルールから外れるようなケースが言語にはたくさんある。日常での自然な会話なんていうのは、例外の宝庫だ。

こういった例外があるからこそ、言語というのは他の記号とは異なり無限の表現を生み出すことができるし、時代とともに変化していくこともできる。しかし分析する立場としては例外は悩ましい。できるかぎり詳細に言語の姿を知りたいのに、例外がそれを阻むのだ。そこでこうした例外がどのようなときにあらわれ、その形式がどのような機能を有しているか、その分析に苦心することになる。これが非常に難しい。言語の姿をおおまかにとらえることまではできても、細部にわたって精密にとらえ、説明することができない。そうしていつしか「わかる」ことより「悩む」ことのほうが多くなっていく。いまの私の目の前には、そういった悩みばかり積み重なっている。英語や日本語のように、数多くの研究成果がある言語においてもいまだわからないことばかりだ。一から調査を始めたシネヘン・ブリヤート語にいたっては、私自身がわかったと思っていることなど、ほんの氷山の一角でしかない。ほとんどわかっていないようなものだろう。

調査機材とフィールドノート

ただしこれは、言語の研究にかぎった話ではない。学問というのはどの分野においても、その真理にたどりつくことは困難なものだ。研究者というのはそれを知りながら、少しでもその真理に近付こうと、目の前の問題に悩み、もがき、答えを導くことに熱意をそそぐ。なぜ困難なことがわかっているのに取り組むのか。それは誰も解いていないさまざまな問いに対し、何らかの答えを導きだしたときの快感を知っているからだ。それを知っているので、ああでもないこうでもないと悩む過程も非常に楽しく感じられる。「わからない」ことは悩ましいことだが、その一方で自分自身を大いに楽しませてくれる対象でもあるのだ。

大学での学問というのは、まさにこの楽しさを知るためにあるのだと思っている。高校までの勉強というのは「あらかじめ答えが用意されている問題」を解いていく。しかし、大学での学問には答えが用意されていないものばかりだ。大学だけではなく、その後の社会でもそれは同じである。こうすれば絶対にうまく解決するなんていう答えはどこにも用意されていない。自らで（もちろんときには周囲と協力して）最善の策を考えていかなければならない。それは非常に悩ましい。しかしそういうときに、答えを導く快感を知っている人は、そこに至る過程も楽しむことができる。それを身につけるのが、大学での学問だといってもいい。私の専門とする言語学のように、資格取得にも就職にも直接は役に立たないような学問分野は数多い。しかしどの分野の学問でも、こうした問いをみつけ、答えを導く快感・その過程の楽しさを知ることはできる。それは結果として、その後の人生に役立っていくはずだ。「答えが用意されていない問題に対して悩み苦しむ楽しさ」を大学生活のなかで知ってほしい。

ところで冒頭の問題に対して、今年ある学生が、次のような答えを書いてきた。「love は変化するが、爱（愛）は変化しない」。これは予想していなかった絶妙な表現だ。意図してこういう詩的な解答をしたのか、それともたまたま説明が足りずこういう解答になったのかはわからない。しかし聞き手・読み手が自由にイメージをふくらませられるこのような表現を作れるのも、また言語のもつ特徴である。言語というのはほんとうに、わからなくて面白い。

近況報告　人間科学科

http://jinbunweb.sgu.ac.jp/ningen/

人間科学基礎ゼミナール

通称「基礎ゼミ」は学びの基礎的要素を身につけることを目標に、１年次前・後期のＡ・Ｂと２年次前期のＣがおかれています。昨年度までは心理･教育領域、思想領域、社会領域、福祉領域、文化領域の５領域の教員が担当する５つのゼミが開講され、それぞれの専門分野に題材をもとめて行われていました。学生は入学時にどの領域のゼミを選択するか希望を出すのですが、学生の興味や志向によって希望者が偏るため、希望外のゼミに入らざるを得ないなどの点が問題として指摘されてきました。2012年度からは領域色を薄めるとともに７クラスに増やして以前にもまして基礎的能力の獲得をうちだし、クラスも自動登録としました。基礎ゼミＡの授業のねらいは「人間科学科での学修の基礎となる、文献を読み資料を集める力、文献・資料を整理し報告する力､他者の発表を聞き討論する力、問題を発見し自分の主張を持つ力、およびグループで協調して作業する力を養うこと」とあります。Ｂ・Ｃの履修でその力に磨きをかけるとともに、履修必修科目である「論述・作文」を基礎にした「国語力」の強化は、本学科の目玉です。

各種実習

考古学実習は置戸町で８月に１週間行われました。実習生６名の他、学内３年生・２年生各１名、１年生３名、東海大学１名、札幌国際大学２名、明治大学２名、東亜大学留学生１名の計17名が参加しました。お盆にぶつかったことから盆踊り大会の準備や運営にも積極的に関わり、様々な体験をしました。また８名の韓国人留学生が１泊２日で別途加わり、初めての盆踊りを体験すると共に地元の方々と交流を深めました。

社会福祉実習は８月から９月に道内各所の児童福祉施設、障害者施設、高齢者施設、病院に分かれて行われ約40名が参加しました。またその報告会が12月に行われました。詳しくは学科のホームページに譲りますが、実行委員会を組織して準備された報告会は第１部が次年度実習生を対象にした「領域別実習施設概要報告」、第２部は「利用者主体」と「連携」の２つのテーマでの発表で、充実した参加型報告会でした。

社会福祉実習報告会

留学生・国際交流

2012年度は、２年生１名が沖縄国際大学に１年間、３年生２名が韓国・東亜大学に半年間の留学をしています。一方、国外からは、韓国の建国大学１名、東亜大学２名、崇実大学２名の５名が人間科学科に来て学びました。また､この４月からは､東亜３名､東国２名、崇実・建国・中国南京師範各１名の８名を迎えます。国外の提携大学は20にも及びますが、海外に飛び出す学生が少ないのが気になります。

盆踊りに参加する留学生

卒業論文

２月12日に各領域の卒業論文の発表会・審査会が行われます。今年度の卒業論文は心理･教育領域で27編、思想領域で16編、社会・福祉領域で48編、文化領域が21編の計112編となります。従来は全領域が教室においての発表会方式で行っていましたが、今年度から文化領域は口頭試問方式に、社会・福祉領域はポスター発表方式へと変わりました。社会・福祉領域の方法はSGU ホールを会場にして各人がポスターを前に６つの時間枠のうち４つで発表を行う方式です。その成果が期待されます。

就職内定状況

2012年12月末現在の就職統計対象者（公務員希望者･大学院進学希望者等を除く）100名の内定率は、前年同期よりも６ポイント近く上昇しています。求人率も12ポイント以上上がっていますので、それに対応した上昇なのでしょう。会計ファイナンス、経営、経済、法律、英米、社会情報の各学科の最も多い業種は卸売･小売業ですが、人間と臨床はサービス業です。サービス業には医療、社会福祉関係が含まれていますのでその影響です。なお、サービス業の中で人間科学科の学生は24の企業に27名が内定しています。例年２・３月に内定者が全学で100名以上増えるとのことですので、今後も大いに期待されます。また、公務員等は自衛官、県警察、町村職員、特別支援学校教員が各１名内定していますが、既卒者も頑張っており、法務教官１名、市町村職員２名（１名は学芸員）、北海道警察２名となっております。

3年生の就職相談

近況報告 英語英米文学科

http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~eigoeibei/

ちまたでは大学とは「講義を聞かせっぱなし」「評価基準はあってないようなもの」「学生は出席さえしていれば単位取得が可能」などと言われています。大学への批判は多々ありますし、その中には改善するべきだと思うものもあるのは事実です。一方で、世間による大学批判のほとんどは、現実の大学を知った上での批判ではないと感じることもあります。事実、大学を批判するのは中年以降の人々です。彼らは自分の大学時代の経験に基づいて語っているのかもしれません。一方で、大学はここ10年、大きく変わってきています。この10年の変化を見ないままに批判するのは、幽霊に槍を投げるようなものです。

この機会に、英語英米文学科の今をご紹介いたします。

①最近の英語英米文学科

4 年前に習熟度別少人数制クラスを採用した英文講読の講義は、現在その効果を検討中です。導入時にはいろいろと批判や不安もありましたが、実際には大きな効果を上げています。第一に、学生のレベルに応じたきめ細かい対応が可能になりました。基礎クラスではインプットを多めにした学習、中級クラスではより実践的な学習、上級クラスでは多方面に英語を使用する学習を行なっています。第二に、学生の学習意欲が向上し、いい意味での競争が行なわれるようになりました。これは TOEIC の点数の伸びだけでなく、それ以外の講義やゼミの活性化にもつながっています。

教員の教授方法にも変化が起きています。コミュニケーション系の講義では、グループワークやプレゼンテーションを多用するなど、学生の発言機会はかなり増加しています。また英語学や英米文化系では提出物に細かいコメントをつけて返却し、学生の学びのモチベーションを上げています。教員にとっては仕事の激増となりますが、一方で学生の成長を目の当たりにして教員のやる気もアップしています。

相手を蹴落とす競争ではなく、周囲と協力して成長していく競争が、いまの英語英米文学科を活性化しています。これが人間形成にはもちろんのこと、就職活動にもよい影響を及ぼすことになればよいと、教員一同が願っております。

大学は勉学の場ではありますが、もちろん勉強一色ではありません。以下にゼミの様子をご紹介します。

②ゼミ紹介―山添ゼミ（英語学）

（ゼミ長　山田　眞衣）

私たちのゼミは、「認知言語学の勉強≧飲み会」という重要度で毎週木曜日勉強しています。山添先生は、関西人ですがボケ担当です。学生全員が突っ込めるほど天然です。前期のゼミ A は、留学生アヨンによる韓国語講座、TOEIC の Part 5 の解答・解説、その後に先生が選んだテキストの英文を一文ずつみんなで精読していくというものです。後期のゼミ B は、前期同様 TOEIC を解いた後、『認知言語学の招待』というテキストを単元ごとに割り当て、その分担箇所を各自20分ほどで説明し、その後質疑応答するという内容です。テキストの難易度が高いため、説明者はレジュメ作成と発表の難しさに頭を抱えています。その間、先生は仏様のように見守っております。

勉強を頑張る一方、飲み会の楽しさは尋常じゃないです。みんなはしゃぎます。もちろん先生もはしゃぎ、お会計した後も、「ゼミ長、ほんまにお金払ったか」と 4 回くらい聞かれ、しつこすぎてキレそうになりました（笑）。

これからも飲み添先生＋ 9 人で勉強していきます。

大学生は遊んでばかりで勉強しないというのは過去の話となりました。よく学び、よく遊ぶ。暗記とコピペですますのではなく、たくさんの知識と経験を有機的に結びつける。これが現在の英語英米文学科の学生の姿です。

近況報告　臨床心理学科

http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~rinshoshinri/

学科の特徴

臨床心理学について、カウンセリングや精神分析、心理テストといったものをイメージされる方が多いのではないかと思います。もちろんこれらの方法は臨床心理学の中核的な部分をなすものですが、その基礎に、人のものの感じ方や行動ついて心理学理論があることを忘れてはなりません。臨床心理学は、さまざまな心理学理論を応用して、こころの働きについて探究する学問です。また、それらの知見を活かして、こころの健康を保つための援助をしていくことにも特徴があります。

本学の臨床心理学科では、こころの働きを理解する上で基礎的な心理学の知識から、心理療法の理論、実践的な技法を身につけるための実習まで、幅広い講義科目が体系的に配置されています。特に実習科目は充実しており、心理臨床現場で用いられる技法について、実際に目にしたり、経験したりすることで、体験的に身につけてもらうことに力を入れています。

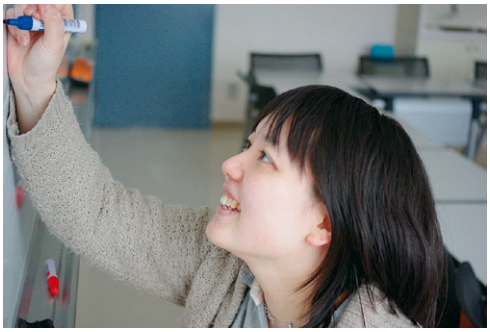
また、こころ健康を保つための援助のなかでは、臨床心理学だけでなく、心理学の他の領域や他の学問領域の知識も必要とされます。例えば、子どものこころの問題について理解・対応するには、子どもの心身の発達を扱う発達心理学や、子どもを取り巻く家族を扱う家族心理学などの知識が必須となります。生きている意味や、生きがいの喪失に苦しむ人と向かい合うためには、哲学的な素養も必要になるでしょう。児童虐待の問題を考えるためには、トラウマ（こころの傷）がもたらす心理的影響とともに、そのような問題が急増する現代社会についても知ることが必要です。本学科では、臨床心理学を中心にしつつ、こころの問題を広い視野から理解するための学びを提供しています。そしてその学びの上に、精神保健福祉士の養成、さらには臨床心理士資格認定協会第一種指定校である大学院（臨床心理学研究科）における臨床心理士の養成を行っています。

学科の学生活動

私は１年生の時に、心理学の歴史や、心理学で使われる情報のまとめ方などを学びました。１年生の時は専門科目があまり多くありませんが、教養を目的とした全学共通科目を通して、心理学にとらわれずさまざまな分野を学ぶことができます。自分が学びたい講義を選択し、視野を広げることが可能です。

２年生では、実習科目も増えて実際に自分で体験することになりました。カウンセリングの基本でもある、ロジャースのクライエント中心療法も実習で体験しました。カウンセリングを行う際にどのようなことに注意しなければならないのか、どのような姿勢で接するべきなのかなど専門的に「聴く」技法を学べたのはとても貴重な体験でした。学べば学ぶほど深さがわかり、これからもっと深くまで学びたいと思っています。まだ、臨床心理学についてわからないことも多いのですが、授業でさまざまな心理学を学ぶことで、日常生活が刺激的なものに見えてきました。人のちょっとした仕草や行動、発言にはこんな意味が隠されているのでは？と考えるのが楽しいです。また、友だち同士で違った考えを話し合い、考えを深めていくのもとても面白いです。

授業以外でも、私は学生生協の活動に参加しています。実際に組織の運営に関わっていくことを通して、世の中の仕組みを知ることもできますし、また仲間と働くことの喜びも実感することができました。充実した学生生活をおくることができて幸せだなと思う日々です。将来自分がどのような社会人になりたいかは決まっていませんが、残りの学生生活を通し、自分が納得する選択をしたいと思います。



（臨床心理学科２年　中山小奈美）

就職・進路など

臨床心理学科の卒業生の進路としては、近年は精神保健福祉士として病院や社会福祉施設に就職する学生が増えています。また、大学院臨床心理学研究科に進学してさらに高度な専門知識を獲得し、臨床心理士を目指す学生もいます。しかし、卒業生の進路は必ずしも心理学の専門的領域だけに限られている訳ではなく、多くの卒業生はサービス業や卸・小売業の分野の一般企業に就職しています。もちろん、どのような進路に進んだ場合にも、臨床心理学科で身につけた人間理解に対する深いまなざしと、援助に対する姿勢が評価されていることはいうまでもありません。特に人事部門などからは働きが期待されています。

近況報告 こども発達学科

こ発の森：http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~child/

子どもの成長・発達について専門的に学びたい！教育現場で子どもたちに教え、彼らの学びを支援したい！と考える学生約200名が、日々、自分の知識と技術を磨き、成長しています。在学生の皆さんの2012年春からの様子を紹介します。

1年生:大学生活スタート！学習に、サークルに、全力！

2012年春、 明るく元気な51名の新入生が入学。入学式では、沖縄出身の菊地君が新入生代表として期待と熱意あふれる挨拶をしました。

１年次は、発達・教育に関わる講義のほか、外国語、論述・作文、コンピュータなどの基礎力を養う科目、そして、発達・教育の諸問題について調べ、発表や討論をする「子ども発達学基礎ゼミナール」を学びます。

最初は戸惑いもありましたが、仲間同士で励ましあい、協力しあいながら、着実に基礎力をつけてきたようです。

スポーツや子どもと関わるサークルにも積極的に参加しています。YOSAKOIソーラン祭りも元気な笑顔で演舞。

2年生：子どもと直にかかわる、教育現場で体験する。

２年次には、具体的な教育や発達支援の方法を学びはじめます。算数や社会、理科など、教科ごとの授業の作り方を具体的な教材を手にしながら学んでいます。

子ども対象の行事をつくる実習では、南幌町の子どもたちを招いてと、大学近隣の子どもたちを招いてとの、初の２回開催にチャレンジ。テーマのシャボン玉作りや光と色の実験は、準備にかけた苦労の甲斐あって、子どもたちに大好評でした。

小学校で授業補助の学生ボランティアをする学生も多く、子どもたちからの思わぬプレゼントに感激する場面もありました。

3年生：自ら理解を深める。文献を調べ、研究する。

３年次には、より実践的な教育や生徒指導の方法を学びます。国語教材の文章構造を理解するための切り貼りなど、教材研究の努力を真剣に実践しています。

一方、専門的なテーマを自らたてて研究する力を養う「専門ゼミナール」では、指導教員の専門分野やゼミメンバーの顔ぶれによって、個性的に楽しくまとまっています。

学生ボランティアのほか、教養ゼミの海外研修で中国・内モンゴル自治区を訪れ、現地の幼稚園の子どもたちと交流するなど、有意義な体験をする学生も。

4年生：教職課程の仕上げと卒業研究、そして卒業へ。

前期は、模擬授業などを行う実践的な事前指導を受け、実習先の小学校で三週間の「教育実習」にのぞみました。実習を懸命に行い、その成果が試される研究授業でも、子どもと向き合って授業をやり遂げた皆さん。一回りたくましくなって大学にもどってきました。

後期は、４年間の学修の集大成である卒業研究を仕上げる時期です。図書館やパソコン室で、あるいは、指導教員の研究室にPC持参で集まり、苦労して仕上げた報告書を無事に提出した皆さんの顔は、とても晴れ晴れとしていました。

卒業の日は、もうすぐです。

TOPICS

2012年度人文学部合宿オリエンテーションについて

人文学部学生自治会執行委員長
段坂　直登（臨床心理学科４年生）

４月６日㈮から７日㈯にかけての二日間、定山渓にて合宿オリエンテーションが実施されました。このイベントは、毎年、大学生活の不安軽減や新入生同士の交流などを目的として行われています。ここでは、教職員だけでなく、２年生以上の学生実行委員や学生自治会等の学生諸団体が協力して運営にあたります。

合宿オリエンテーション１日目は、本学部卒業生の井上秀美氏による講演がありました。氏は、東日本大震災の被災者を支援するNPO法人に参加されており、そこでの経験や被災者の置かれている現状、今後の展開についてお話くださいました。講演会が終わると新入生はバスに乗り、定山渓温泉へ向かいました。宿泊ホテルに到着すると各クラスに分かれ、ゲーム大会などのクラス別企画を行います。はじめは緊張していた新入生も笑顔が増えて徐々に打ち解け合い、夕食の時間ともなると、笑顔や笑い声が絶えずあふれるようになっていました。夕食後は人文学部４学科合同の交流会でクラス対抗ゲームを行い、新入生同士の親睦をさらに深めているようでした。

合宿２日目には、教員や先輩学生による履修相談や課外活動に関する相談などを行う時間が設けられています。和やかな雰囲気の中、数日後から始まる学生生活に備え、積極的に相談しようとする学生が多く見受けられました。

最後になりますが、新入生には合宿オリエンテーションをとおし大学生活を充実させる準備をするとともに、自らが成長する良いきっかけとなればと思います。

講演会　井上講師

TOPICS

盛り上がった「人文学部1年生体育大会」

人文学部１年生体育大会実行委員長
平　沙菜恵（臨床心理学科１年生）

2012年６月16日㈯、第34回人文学部１年生体育大会が行われました。今回の体育大会では、バドミントン、ドッジボール、玉入れの３種目を行いました。合宿オリエンテーションの際に決まった１年生体育委員たちが大会までの約３カ月の間、種目やルール決めから当日の運営まで、紆余曲折しながら頑張りました。仕事の合間には他のクラスがダンスをするという話を聞いて自分のクラスでもコスプレをすることになったり、色々な意味で暴走させてもらいました（笑）。

体育大会実行委員長は、私と、立田大貴君（臨床心理学科）の２人が務めました。最初、私たちが実行委員長になって種目を話し合っていたときには「本当にこれでうまくいくのかなぁ・・」と心配になったり、うまく会議の場をまとめきることができず不安になることも多かったです。しかし大会当日になってみれば、そんな心配は全く無意味だったことに気付きました。体育委員の仲間たちは互いに協力し合いながら仕事をすすめ、こちらが言わなくても動いてくれるし、大会は自分が想像していたよりもとても盛り上がりました！私自身はコスプレをして騒いでいただけ…とまでは言いませんが、とても楽しませてもらいました。体育委員の仕事ぶりやコスプレやダンスで盛り上がってくれる１年生を見て、中学生や高校生とは一味違う自主性や積極さを見たような気がしました。コスプレをしている実行委員長二人が学生のみなさんにどのように映ったのかはわかりませんが（笑）。

来年度の体育大会も、今年と同じくらい率先して、いい意味で「ふざけてくれる人」が実行委員長だったら嬉しいです。

留研報告　英語英米文学科　講師　西　真木子

英 国 レ ス タ ー に て

キャンパス内
英文科研究室のある建物

2012年４月から１年間、イギリスのレスター大学に客員研究員として滞在させていただきました。その間研究先での情報交換や文献収集等、充実した時間を過ごすことができました。また留学生として過ごしたこの街を今度は研究員として訪れることができ感慨深いものがありました。

私の研究分野は現代の小説を中心としたイギリス文学のため、作家の公開対談会に参加するなど生きた情報に触れられたことは有益でした。現代文学研究の醍醐味は、作家の評価が少しずつ変化する過程をじかに感じられることです。例えば、私が留学中大学院博士課程で V.S.ナイポール(1932-)というポストコロニアル文学の小説家について研究していたさなかに当作家がノーベル文学賞を受賞した時は、特別な瞬間に居合わせたことに感銘を受けたものでした。同様に今回は、ロンドンにある有名なナショナル･ポートレイト･ギャラリーにナイポールの肖像画が新しく加えられており、いろいろな分野の著名な人物画の中にそれを見るのは、当作家の研究者兼一ファンとして喜ばしいことでした。

滞在中は人々の親切や温かさにも恵まれ、東日本大震災についてもしばしば励ましの言葉をいただきました。例えばフィッシュ・アンド・チップス店でのことですが、オーダーを済ませると店員が中国人かと聞くので、日本人だと答えると、「あの津波を経験したのか」などと大変同情してくれました。さらに「日本人がいる」と店の奥からわざわざ呼び出された父親は、「他国で同様のことが起これば略奪や暴動くらい起こるだろうが､日本人はよく耐えている、頑張ってくれ」、と激励の言葉を下さいました。3.11後間もない４月の出発に後ろ髪を引かれる思いだった自分にとって、心にしみる言葉でした。

在外研究の期間に得た数々の貴重な経験を、今後は研究や教育に生かしていきたいと思います。最後になりましたが、快く送り出して下さった教職員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

新任教員自己紹介

人間科学科　教授
杉山　四郎

６年ほど前、36年間の高校勤務（社会科担当）を終えました。その後の５年間は、居住地（岩見沢市）の人々（社会人）を対象とする勉強会（アイヌ民族を中心に据えた北海道史）をするなど、引き続き“教師”の役割を果しています。

それらの行為の中から得た教訓は、“誠意をもって事に当たる”ということです。時間を守る・よく調べる・理解したことをわかりやすく話す・間違っていたらそのままにしておかない・・・。そうすることで、集まった生徒・人々もよく聞いてくださり、質問したり、意見をいってくださる、と。

人文学部人間科学科（教職課程担当）に勤務して１年。自分に甘さを持っている学生（２年生が中心）が大半なわけですが、「自分に厳しく・他人にはやさしく」（これは私のモットーです）の上に､教師になるための､上記の“教訓”を身に付けさせたいと考えています。

◆編集後記◆

興味深い巻頭エッセイが続いています。学生や一般の方向けに利用したいなと考えていたら、早速同種の相談が入りました。大歓迎です。各学科の内容は「近況報告」としましたので内容は多彩となりました。今後は前後の学科の構成・内容と比較されつつ、進化するのではないでしょうか。今回からカラー印刷としました。その特徴を生かせる紙面づくりが今後の課題だと思います。（鶴丸）